



高松 さおり たかまつ さおり

富山高等専門学校 物質化学工学科助教
研究分野 環境工学：環境材料・リサイクル

富山工業高等専門学校 環境材料工学科 卒業
富山工業高等専門学校 専攻科機能材料工学専攻 修了
金沢大学大学院 自然科学研究科 博士前期課程 環境基盤工学専攻 修了
(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構 産業技術養成技術者(NEDOフェロー)
金沢大学大学院 自然科学研究科 博士後期課程 環境科学専攻 修了
富山工業高等専門学校 環境材料工学科 助教
富山高等専門学校 物質化学工学科 助教(現在)

どのような研究をしていますか？

現在の主な研究テーマは、「未利用資源リサイクル技術の開発」です。現在は、リンについて取り組んでいます。リンは、生物が生命を維持するために必要不可欠な元素であるとともに、現代では農業・工業などにおいても非常に需要が高い資源です。日本ではリン資源を全量輸入に依存している一方で、下水汚泥などの廃棄物中にはリンが濃縮されています。私の研究室では、これらの未利用リンの再資源化について研究しています。

高専の教員になったきっかけは？

高専の専攻科を卒業した後、大学院に進学しました。博士後期課程2年の時に国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構の産業技術フェローシップ事業に応募し、採用後はNEDOフェローとして富山高専に派遣され、研究・技術シーズを実用化・事業化につなげるコーディネーターとして3年間勉強させてもらいました。その際、大学院での研究も続けたかったので、社会人学生として受け入れてもらい、4年かかりましたが修了することができました。その頃、富山高専で助教の募集があり、自分の出身で

若い人を育てたいという情熱のある方におすすめです

高専の先生は大学の先生よりも学生達に近い存在。学生たちに、「この学校に来て良かった」と思ってもらいたために仕事をしています。さまざまな制度を利用して、自分にあったライフスタイルを見つけ出せるのも魅力です。

ある富山高専で、NEDOフェローの時の経験も活かしながら、自分の後輩たちが「この学校で学ぶことができて良かった」と思ってもらえる教育がしたいと思い、応募しました。

高専の教員になっていかがですか？

出身高専であり、NEDOフェローとしても3年間受け入れてもらっていたので、学内の雰囲気はだいたい理解していましたが、着任当初は自分の学生の頃を知っている先生がまだ大勢いらっしゃったので、気恥ずかしくて少々やりにくかったですね。教員という立場になって初めてわかったことも多々あり、色々な先生に助けていただいたことがたくさんあります。学生時代から私を知る女性の先生からは、「数少ない女性教員であり、卒業生でもあるのだからしっかり育てたい」と言っていたこともあり、教員として今後も成長していきたいと思っています。

どのような仕事をしていらっしゃいますか？

採用されて半年は環境材料工学科に所属していました。2009年10月から地域イノベーションセンターの専任教員になり、NEDOフェローで学んだ経験を大いに活かすことができたと思います。2011年4月からは教育技術センターの専任教員として、地域の自治体や企業、学校と連携した人材育成、PBL (Problem/Project Based Learning) などのアクティブ・ラーニング、知財教育、ESD (持続可能な開発のための教育、Education for Sustainable Development) などを盛り込んだ授業支援等について取り組みました。

出産・育児のため1年2ヶ月の育児休業を取得しました。育児休業を取得する際に最も気がかりだったのが、研究が停滞してしまうことと、研究室に配属されている学生のことでした。結局、途中から学生たちは研究室の配置換えをすることになり、当時の学生は大変だったと思います。専攻科生については同じ研究チームの先生にお預けし、研究テーマが変わらないよう配慮しました。



育児休業取得後の現在は物質化学工学科に所属しています。学科所属になると主事補や担任といった仕事をするようになりますが、2014年度は学生主事補、2015年度は寮務主事補を担当しています。寮務主事補の定例業務である朝と昼の寮の巡回、様々な寮の行事を学生とともに企画するなど忙しくもありますが、とても楽しく業務に携わらせてもらっています。その他、隔月で寮の日直もしています。富山高専の本郷キャンパスでは男性教員は宿直、女性教員は日直を担当しています。クラブでは茶道部と美術部の顧問をしています。

また、今年度から富山高専の男女共同参画を推進するプロジェクト「女性スマイル・アッププロジェクト」の推進委員という仕事もしています。本パンフレットにも委員として携わっています。これらに加えて、学生の教育と研究活動も行っています。授業や卒研指導など毎日とても忙しいですが、充実しています。

どのような日常生活ですか？

子供がまだ小さいので、職場復帰後から現在まで「育児部分休業」制度を利用し、始業時刻を1時間ほど遅らせています。「育児短時間労働」制度を選択することもできましたが、私には「育児部分休業」のほうがフレキシブルに活用できそうだったので、こちらを利用しています。

また、2014年7月から国立高専機構の女性研究者研究活動支援(研究支援員配置)事業を利用させてもらっています。2014年度に引き続き2015年度も申請し、1名の研究支援員が配置され、実験補助やデータの整理・解析、文献調査などの補助的な役割を担ってもらっています。研究補助的な業務を遂行するための能力を持つ研究支援員を探すのはなかなか大変でしたが、2014年度も2015年度も本校の卒業生で良い人が何とか見つかったので良かったです。できれば申請可能な期間内は、研究支援員制度を利用させていただきたいと思っています。

限られた短い時間の中で仕事をこなさなければならぬので、始業から終業まで毎日仕事に追われています。仕事が終われば保育園に子どもを迎えに行き、そこから

夕飯の買い物をして、食事の支度をして、家事をして、と大忙しです。平日にすべての家事を完璧にこなすことは私にはとても無理なので、優先順位の高いものから消化し、細かいところは土日にまとめてやるなどして対応しています。だから、平日の家の中はとても人にお見せできる状態ではありませんね。今は食洗機を買おうと思っています。皿洗いを自動化し、なるべく家事に費やす時間を短縮し、ストレスが溜まらないよう、お金で解決できるところはお金に頼ろうと思っています。

あとは、家族の協力が必要不可欠です。子どもが病気になった時は、夫婦で対応できるときはどちらかが休みを取りますが、私と夫の互いの実家に頼ることも多々あり、助かっています。子どもをお風呂に入れるのは夫の担当ですが、会社員として民間企業で働いており、早く帰宅するのがなかなか難しいようです。しかし、お風呂に入れる時間が遅くなるのも困りますから、なるべく早く帰るよういつも言っています。その他、ごみ捨てや時々家事もしてくれます。もう少し主体性が欲しいところですが、なかなか従来の性別役割分業意識を変えるのは大変ですね、お互いに。当人同士の意識もそうですが、地域や職場などの意識も変わらないと夫婦が平等に仕事と育児に携わるということはなかなか難しいですね。

高専教員を目指す人へのメッセージ

- 高専は大学ほど資金が潤沢ではないので、科研費など外部の競争的資金を獲得する努力は必要になると思います。修士や博士課程の学生はいませんが、高専5年生や専攻科生(大学3・4年生に相当)に適したテーマで、大学では取り組まない、だけど必要とされているニッチな分野を狙うなどの工夫次第で面白い研究をすることもできると思います。
- また、一人で背負うのではなく、協力者を集めてチームで取り組むということも大切かもしれません。地元密着型で社会に貢献し、若い人を育てたいという情熱のある人には、いいところだと思います。